季刊

郷土のとびら

2017年４月発行　第７号

高取焼　宅間窯・内ヶ磯窯

直方市で開催される高取焼大茶会。筑前藩の御用窯であった高取焼の歴史を探ってみましょう。

高取焼は、「筑前国続風土記」によれば、黒田長政が豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に朝鮮から陶工を連れ帰り、高取城を守っていた手塚水雪に命じて、慶長 11 年（1606）に鷹取山のふもと、藩の御用窯として永満寺の宅間に最初の窯を作り焼物を焼かせたことから始まります。その陶工が高取八蔵（八山）です。宅間窯では日用雑器を中心に焼かれていました。

慶長 19 年（1614）、高取八蔵は永満寺内ヶ磯に移り窯を開きます。14 の焼成室を持ち、全長 45mに及ぶ階段式連房の登り窯で、茶器と雑器を焼きました。茶器は大名家への贈答品に用いられ、伝世品として後世に残されています。雑器は日用の器として福岡藩内だけでなく広い地域で使われていたことがわかっています。各地の焼物の特徴を取り入れ、また当時流行した古田織部風の茶器も作られていました。

長政亡き後、朝鮮への帰国の願い出が二代目藩主忠之の怒りにふれ、高取八蔵は内ヶ磯を追われ、現在の嘉麻市山田に蟄居させられました。この時から直方の高取焼は途絶えてしまいます。

昭和 54 年から直方市教育委員会による本格的な発掘が行われ、現在高取焼として伝わっている焼物が、宅間や内ヶ磯で焼かれたことが明らかになりました。これは陶芸の歴史において画期的なことでした。

『筑前高取焼の研究』　尾崎直人/著　N751 ノ
『「織部好み」を焼いた筑前藩窯　桃山茶陶と内ヶ磯古窯』　小山亘/著　N751 ノ
『炎は海を越えて　高取焼再考奮戦記』　高取静山/著　N751 ケ

直方あの頃

昭和 30 年～昭和 32 年

「菜殻火」が直方市で発行された昭和 31 年頃、直方市では、どんな出来事があったのでしょう。また、この年になにが流行したのでしょうか。

昭和 30 年(1955 年)
　５月　直方青年会議所発足
この年、テレビ・洗濯機等による家庭電化時代始まる
昭和 31 年(1956 年)
　４月　直方高等学校新校舎工事起工
この年、「ケセラセラ」流行
昭和 32 年(1957 年)
　７月　直方ロータリークラブ創設
この年、「有楽町で逢いましょう」流行

郷土の人々　俳人　野見山朱鳥

野見山朱鳥（のみやまあすか　1917～1970）は、現在の直方市新町に生まれました。今年は生誕 100 年にあたります。朱鳥と俳句との出会いは、病気療養中の 1945 年。高浜虚子に句稿を送り、高い評価を受けました。それから高浜虚子に師事し、しだいにその名を知られるようになりました。

「火を投げし如くに雲や朴の花」

虚子主宰の俳誌「ホトトギス」（昭和 22 年 12 月号）の巻頭を飾ったこの句は、代表作として多賀公園にある句碑に刻まれています。

第一句集「曼珠沙華」に序文を寄せられるほど虚子から期待されていた朱鳥ですが、次第に虚子から離れ、独自の世界を創り上げていきました。

「生涯は一度落花はしきりなり」　「曼珠沙華散るや赤きに耐えかねて」
「うれしさは春のひかりを手に掬い」　「亡き母と普賢と見をる冬の夜」

昭和 27 年から主宰した俳誌「菜殻火」は朱鳥の死後も平成 27 年 4 月まで刊行され、多くの俳人たちの研鑽の場となりました。若い頃画家を志していたとされる朱鳥は、「菜殻火」の表紙絵や挿絵も手掛け、絵画にもその才能をのぞかせています。

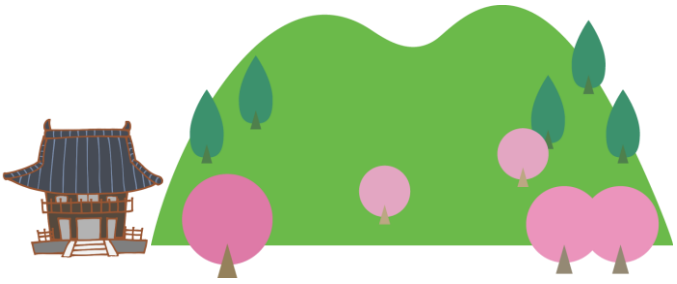
『野見山朱鳥全集 1～4』N918 ノ
『曼珠沙華』N911 ノ
『天馬　野見山朱鳥句集』N911 ノ
『炭坑俳句集　燃ゆる石』N911 ノ
俳誌『菜殻火』N911 ノ
『野見山朱鳥の世界』N911 ノ

はじめの一歩　～郷土資料の紹介～

直方市立図書館にある郷土関係の本を紹介していきます。
郷土の歴史や文化に興味をもっていただくきっかけになればと思っています。

この季節、暖かくなり、ちょっと遠出してみようかという方も多いのではないでしょうか。
そこで今回は、福岡県内の神社や山歩きに関する資料をご紹介します。

『福岡県の神社』　アクロス福岡文化誌編纂委員会/海鳥社/N175 ケ
『福岡市歴史散策』　福岡地方史研究会/海鳥社/N291 タ
『福岡県の山歩き』　福岡山の会/海鳥社/N291 ケ
『福岡県の山』　山と渓谷社/N291 ケ



直方市立図書館
直方市山部 301-1 ユメニティのおがた内
TEL　0949-25-2240　FAX　0949-23-3902
http://www.yumenity.jp/library/library.htm